
特殊任務！

星乃杏奈

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

特殊任務！

【Nコード】

N9673W

【作者名】

星乃杏奈

【あらすじ】

それは、上司から渡された一枚のチケットから始まった。「お見合いパーティー」に内緒でサクラ参加なんて…。言わなくちゃ、今日こそ本当に話さなきゃ！

「ちょっと、相田さん頼み事がある」

今思えば、その上司の一言が事の発端だった。

「なんでしょう」

当時、新しいプロジェクトのメンバーに選ばれたのかなとか少しウキウキした気持ちで席に向かったんだっけ。

「はい、君には特殊任務を行ってもらおう」

「へえ？」

上司が机の中から大切そうに一枚のチケットを取り出した。それは、ピンク色で薔薇がいっぱい描かれている乙女チックなチケットだった。

期待していた事とは違ったけど、ケチで有名な部長が物を人にあげるなんて。

私はそこに驚いてしまった。

「特殊任務って、これ私に頂けるんですか

へえ、でも私誕生日でもないですし、成績がトップってわけでもないんですけど」

「いや、相田。

よくチケットを見る。チケットを」

部長に言われた通り視線をチケットに向けると…

そこには金色の文字で『お見合いパーティー』と書かれていた。

「おっ、お見合いパーティーですか」

「おい、大きい声を出すな。」

これは、あくまで特殊任務であり、極秘任務だ」

部長の態度といい、このチケットは何か嫌な予感をむんむんと感じる。

「あのな、実はチケットにも書いてある通りこのパーティーの主催は取引先だ。」

しかしだな、このパーティー思いのほか人数が揃わなくてな。

こうやって、上から無理やり券がやって来たわけだ」

まあ、確かに休みの日にわざわざスタジアムに出向こうとは思われないなー

私だったら、休みの日はゆっくり目覚ましかけずに二度寝するし。

でも、疑問に思うことがひとつある。

「部長、で何でそのチケットが私に来るんですか」

そっだ。

もともと、女子社員はうちの部だって数人いるのに、よりによって私。

部長の態度を見るに、他の子に声をかけている様子は伺えないし。

「それはだな。」

君は、口が上手そっだからだ」

「口の上手さが、このパーティーには必要ですか？」

「口の上手さがいるに決まってるだろう。」

人が集まらないというのは、あくまでも極秘の情報でだな。
出席する人間は、あくまで一般の会社関係なく結婚したいと思っ
ていなきゃならないからな」

納得するような、しないような

「もちろん、これはある意味で労力を使うわけだから
特別手当が出るらしいぞ。」

「サクラで手当って、罪悪感が残りますけど
私じゃなくても、他の子に・・・」

「何も罪悪感を感じることはないぞ。

現に相田さんは結婚してるわけでもなく、騙そうという気もない。
ただこの三時間を大人しくしていれば、助かる人間がいる。
だったら、手当ての出る人助けいいだろ」

熱心に語る部長を前に、私は首を横に振ることは出来なかった。

「で、部長の頼み事。特殊任務ってやつ？
引き受けてしまっちゃたのか」

「はい。」

その通りです美紀さま」

結局、あの時反論する言葉が見つからなくて
しぶしぶ。本当にしぶしぶ引き受けることになってしまった。

「でも、いいじゃない考えようによっては」

「手当てが出るからでしょ」

いくら手当てが出るとはいえ、そこまでお金に困ってるわけじゃないし

「手当てとか、そういう問題じゃなくて。」

あんた今、フリーな訳だし、ある意味では参加条件満たしてるじゃない。

成人してて今現在未婚っていう条件を」

「何が言いたいなのよ」

「だからさ、極秘任務といえども本気で探してみたら？」

案外、いい相手見つかるかもよ」

最近、新しい彼が出来たからかしれないけど言葉の端々に嫌味を感じる。

いい相手なんか居るわけじゃないじゃん、部長に言われたんだから。

「あつ、そうだ。」

念のために言っておくが、その男性メンバーも多分君と同じ特殊任務の人間が大半だ。

でも、くれぐれも口を割るなよ。

サクラ いや、特殊任務であるということを」

私は忍者かよ！

「でも、分からないよー

口を割らずしてゲットできるかもしれないじゃん」

「人事だから言えるのよ

ああ、気が重たい。重たすぎる」

特殊任務、当日

都内某所 外資系ホテル

「へえー、やっぱり結構意気込んで計画したんだ」

部長の言う『特殊任務』を断る事は当然出来ず、当日を迎えてしまった。

さすが、サクラを動員するだけあつてか規模も大きく華やか。

1、サクラだと気づかれてはいけない

2、本気の会社の人間にも見つかつてはいけない

1番の理由は、部長にも念を押された話だけど、これは自分の意識次第で良しとして。

2番目の今回の婚活パーティーに本気でお相手を探しにきている会社の人間に見つかるという事が、今後一番面倒になりそうなので避けたい。

私の小さなプライドが『お見合いパーティー』に出たという事を許さないから。

とにかく、この三時間を大人しく地味に過ごそうと決め華やかなバルーンアーチをくぐった。

「お名前を確認できましたので、番号札をとって中にお入り下さい」
私は言われるままに、番号札を貰い会場に入る。

いいなー、同じ休日出勤でも受付で来場者に番号札渡す方が楽だよ。

いぎ、会場内に入ると沢山の男女が入り交ざっていた。

部長が言うように、サクラ仕込む程の人数割れが起きたなんて考えられないなー。

サクラが殆どというと、上辺の偽りパーティーって考えると面白いかも。

まっ、どっちみち最後は美紀情報によるとお互い気にいられないと成立しないだからね！

そう考えれば気が楽になったかもと、私は入り口で手渡されたウェルカムドリンクに口づけた。

「あいださん、ちょっと
あいださん」

うん？

後ろから、私の名前を呼ぶ妙な声が聞こえる。

確かに私は『相田』だけでも。

ここは、下を向いて、無視しよう。場所が場所だし。
と心の中で呟いていると。

「やっぱり、相田さんだね」

そこには、うちの社きつてのエリートでイケメンともてはやされている瀬崎さんの姿があった。

見つかってしまった！

確かに、アルコールの入ったシャンパンのせいもあるけど大人しく地味にしのぐはずが。

もう私、どうすればいいの—————

こんなに近くで、瀬崎さんを見た事は無かったけど噂通り背も高く
て顔も良くて

絵本に出てくる王子さまってこんな感じなんだろうなって思わせて
くれる。

へえ、やっぱりそういう、何ていうんだろうか

探さなくても見つかる部類の人種がこの会場にも来ていると思うと、
少し笑えてくる。

「一人、ぼーつとしてる様だけど
ちよっと、いいかな？」

「あ、っはい」

そうだ、そうだ。

今、瀬崎さんから声をかけられてたんだ私。

「今日は、自分で参加？」

この質問は、「自分で券を買って参加したのか」と聞きたいのだろ
う。

部長には、あくまで『特殊任務^{サクラ}』って事をバラすと言われてるけ
ど、

こんな綺麗な人に対して恥ずかしい。

あー、言いなさい私。

今日は少し興味があつたから、このパーティーに自分で参加したって

「ごめん、質問が悪かったね

返事が返ってこないという事は、君は会社からの援助組という訳か」

「っあ」

私が早く答えを返さなかったから、バレたか？バレてしまったか？

「別に、君が悪いんじゃないし大丈夫だよ

俺も援助組だし、聞かされているとおりサクラが大半だから」

「そうなんですか」

そうだよな、じゃないと瀬崎さんも居ないか

やっぱ向こう側の人間だもん。

「取引先の会社、ここのホテルに少し借りがあつて

その借りを今回の件で返そうって事らしい。

じゃないと、普通ただ券配って行おうって思わないだろ」

そういう裏があつて、私にこの券が回ってきたのか。

瀬崎さんの話を聞いて一人物思いにふけていると

『それでは、ただ今から2ショットタイム！』

『ご持参された券に書かれてある同じマーク同じ数字のお相手を探してください。』

楽しいトークタイムの始まりです』

と司会の方の声が会場に響いた。

「こんな大勢の中から、お互いのパートナー探すの難しいですね。瀬崎さん、ちなみに、どのマークの何番ですか？」

ここでお別れなら、少しでも話して美紀のお土産話にしてやろうと、私は彼に思い切って自分から話しかけてみた。

「ちょっと待つて。」

えっと、マークは何だろう。

ハートの16かな、君は？」

「そうですか、こんな大勢の中じゃ難しいと思いますけど、お相手が早く見つかるといいですね。えーっと、私は。。。」

私は思わず券を二度見してしまった。

この手にしている券にもハートがついていて、かつ番号は16が刻んである。

「相田さん、ハートの16じゃん」

「そつみたいですね」

もう、内心は口から心臓が飛び出るくらいドキドキしている。
同じ部署になったことないし、共通の知人が居るわけでも無く。
話をする事が無い上に、変にイケメン。

「まっ、三時間で終わるし

相田さんも、ここでお相手見つけようって気は全然ないんですよ」

「まあ」

「じゃ、お互い利害一致ってことで。

このトークタイム終わっても横に居てくれないかな」

「はあ、瀬崎さんが良ろしければ」

ちよーっと面倒な展開になってきている様な・・・
神様、お願いですから面倒だけは・・・

結局、私は最後まで瀬崎さんと一緒に

晩ご飯までご馳走して頂き、お互いの番号交換までしてしまった。

「何か不思議だなー。」

今回はケチ部長が導いてくれたっていうか」

今日交換した瀬崎さんのプロフィール画面を見ながら、まだ私は興奮冷めやらない。

でも、不思議なんだよね。

あれだけ大勢居た中で、チケットの番号がまったく一緒なんてこんな偶然ってあるんだろうか。。。

「相田さん、ちょっと」

翌日、通常通り業務を行っている、これまた部長から御呼びがかかった。

もう、部長に呼び出される事、自体が良いことじゃ無い。

さすがに疫病神とまではいかないけど、面倒な話を連れて来るのが部長だ。

「先日は、どうもありがとう。」

おかげで、大成功という事で先方も一安心しているそうだ」

「はい、私も雰囲気を楽しめたので良かったです」

ここは、当たり前障りの無い言葉で場をしのいで、面倒を言われる前に席に戻りたい。
あー、戻りたい。

「ところでな、これまた君になんだが

これから急ぎで第三会議室の奥の部屋へ行ってくれ」

「第三会議室ではなくて、奥の部屋ですか？」

確か、この会社には会議室は第三までしか無かったはず。

ということは、これまた面倒をふっかけようとしているのか、この人は。

「なーに、怖い顔をしなくても君なら大丈夫と

私からも太鼓判を押したプロジェクトに任命されたんだよ。

胸を張って、うちの部署を代表するという気持ちで行ってきなさい」

とニコニコ笑いながら部長は私の肩にポンと手を置いた。

「はあ」

「では、第三会議室の奥の部屋へ行ってらっしゃい」

とりあえず私は、書くものを持って、その第三会議室の奥の部屋へ向かった。

「ここかな」

確かに第三会議室の奥には、私の知らない部屋が存在した。他にもメンバーが居る中で、何でこんな奥まった部屋でする重大そうなプロジェクトに私が選ばれたのか分からないものの、重い気持ちでドアをノックした。

「失礼します」

とそこで、顔をあげると、、、

何と、先日あの『特殊任務』でお会いした瀬崎さんの顔があり、内心ビックリ。

「どうぞ、かけたまえ」

驚くことに、そこには普段あまり見かけない社長の姿まである。一体、また私は今回何に巻き込まれてしまったのだろうか。

「人数が揃ったという事で会議を始めようか」

私はよく分からないまま、瀬崎さんの隣に座らされ会議がスタートした。

内容も分からないままの私は社長を前に冷や汗たらたらだ。

「では、会議を始めるにあたって関連資料をお配りしますね」

と、その声の先には美紀が。

そうか、彼女は社長の秘書に最近移動したんだっけなー。

「はい、どうぞ」

意味ありげに、こっそりウィンクしてくる美紀。
今は仕事中でしょ、と思いながら資料を貰った。

「さあ、開いてくれ」

社長の声で一斉に開かれた資料

その資料には大きな文字で『テスター・ハウス』と書かれていた。

「テスター・ハウスですか？」

思わず聞きなれない言葉だったので、声に出してしまっていた。

「そうだよ相田くん。テスター・ハウス

このプロジェクトは今期最大のものになるからね」

どうやら、社長はこのプロジェクトに社運をかけている感じが大きく伺える。

「では、説明するよ」

と社長はニコニコとそして楽しそうにプロジェクトの概要を話始めた。

「うちの会社は住宅、主にマンションの開発そして売買だが最近の世情があつてか売れ行きが悪い。

そこをどうにかしようというのが、今回のプロジェクトだ。今回、新規で新しいマンションブランド。

まあ、完結にいうとルームシェアハウスを作るんだ。」

確か、最近主人公がルームシェアするドラマがあつたみたいだし。可愛い外装と内装で、けっこう売れるんじゃないかと心の中で呟く。

「確かに、家賃は人数分で割れますし

社会人であれば寝に帰る様な感じですから良いかもしれませんね」と瀬崎さん。

ん？私って、呼ばれる必要あつたわけ？

「いや、それだけじゃないんだよ今回は。

このシェアハウスは、ただのシェアハウスではなくて

こう、どのようなかな同棲するカップルの未来型シェアハウスなんだ」

ん？

「君達には、今度も特殊任務^{サクラ}として、そこに住んで
ブログなんかで広報して欲しいんだ」

んん？

「もう、知らない間同士じゃないだろう
この前の、アレで」

えーーーーー！！また、巻き込まれるの！？

06（後書き）

やっと始まりのような感じですよ
汗

「えっと、お話が分からないんですが」

今の社長の話によると、私と瀬崎さんで『テスター・ハウス』の住人になれという事ですか！？

思わぬ話で、頭がくらくらしそうだ。

けど、入社して数年間、目立った事は自分が覚えている限りではない。

容姿ともども目立ちすぎる瀬崎さんに比べては、明らかにそうだなのに、何でよりにもよって瀬崎さんと私なのだろう・・・

「誰にしようかっていうのは、無作為に決めようと思ったんだが、この物件は、住むお客様向けではなくて

どちらかというと親御さんの意見を取り入れて作る。

高所得者層の物件でな、空間全オーダーメイド。

するとだね、こう、モデルが必要なんだよ」

よくも分からない理由を社長は次々と話してくれる。

「でも、こんな重大な事一人で決めてしまったら

僕の社長という立場で不公平が生じるからね。

くじで引いてもらって当たった2つの部署に独身で一押しの人材をと

私が注文をつけたら君達が来たというわけだ」

不公平って、社長は部長達に責任を丸投げしたんじゃないや、

「じゃあ、あのお見合いパーティーは」

ほら、瀬崎さんだって困ってるじゃん。

急に社長命令だからといって、知らない人間と同居しろなんて。

「あの、パーティーは本当にあつたもの。

まあ、多少の嘘というか付けたしを加えて君達を動員したけど」

爆弾を投下して、のほんと珈琲をすする社長。

「なーにも、心配する事はないんだよ。

もちろん広報の仕事はしてもらうけど、家賃は無料。

そして空間は専属コディネーターに任すけれど

食器や細かいインテリアは子会社から無料提供。

そして、まだ着工してるのは君達の部屋だけだから

高層マンションを最上階で独り占めじゃないか、

二人締めできてきまうよ」

もう、有無も言わさぬ社長が悪魔に見えてきた。

「でも、こう私達の意思ってあるじゃないですか」

それとなく、ご遠慮したいよーシグナルを送るも

「もちろん、プライバシーの保護は抜群。
そこら辺は他人ってことで、きちんと完璧」

砕けた・・・。

「ねえ、瀬崎さん」

あなたの實力なら、断れる。断れるよ。瀬崎さん。
お願いします。

「うーん、社長がそこまでいうなら」

「うえ！？」

思わず、声にもならない声を口から出してしまった。

「いや、その瀬崎さん。」

私達、そのあの日以来会ってないですし、
元々親しくないですし」

「親しくないから、いいんじゃないの？」

それは、意外な声が返ってきた。

「さすがに初めて聞いた時はビックリしましたが、
家賃が無料って大きいですよ。

半分は海外出張ですし、半分は休日出勤。

家に居るってことは、あまりないですし。
丁度、契約の更新時期なので、まあ」

うわー、言葉が出ない。

「だって、相田さん

僕は殆ど家に帰らないから、君は家独り占めだよ」

どうしょ頭が痛い。

こんな不思議で軽かったの瀬崎さん。

「はい、乾杯」

カチンと生ビールのグラスを合わす。

結局、あの特殊任務という外れクジのプロジェクトの結論は後日という事で解散となった。

帰ってきてからの部長の見え透いた笑顔には、腹が煮えくり返るくらい憎らしかった。

「全部知ってたんでしょ、美紀」

こいつは、社長&部長と合わせて面倒な事を引き起こす要因となった人物。

よくも、あのお見合いパーティーの時に白々しい態度をとってくれた。

彼女の演技は賞でも貰えるんじゃない？

「半分知ってて、半分は知らなかった。

これは本当のことよ」

「あやしー」

もう、こうなると飲むしかないね。

今日は金曜日で、明日の予定は無し（寂しいけど…）

店に入って飲むのも面倒になったので、宅飲み。

「でも、あんたがクジで当たりしたのは種も仕掛けありません

よ。

私も立ち会ったけど、けっこう抽選箱に入っていた人数多かったし。

総務の松田さんとか、人事の岡本さんとか。

まあ、その中からうちの社きつての王子を引いたっていうのが
こう、社長の運の強さというかねー」

実験台は美しいものの方がいいでしょ、と笑いながら美紀はチーズを口に運ぶ。

そりゃ、瀬崎さんは美しいけれども私は、、
どうなってしまうのよ。。。。

「諦めて、流されなさいよ」

「へ？」

「神様がくれた最初で最後の大きなチャンスでしょ。」

例えば家にそんなに帰ってこなくても、そこが家なんだし
嫌でも王子と仲良くなれるじゃない」

まさに、他人の意見だわ。

「他人だから言えるのかもね。
思ってる事顔にすぎ」

半分出来上がっている彼女は、ケラケラと笑いながら話続ける。

「でもさ、漫画であつたじゃん。」

人間がペットとして他人と同居するってやつ。
あれと一緒にじゃない、あつ雪はペットの方！
瀬崎さまとは格が違うから、あはは

何が、あははよ酔った勢いで何でも言っていると思っていやがる」
イツ。

どうして私がペットよ。

「考えてみなさいよ。

すべての生活費を会社がみてくれて、家賃も無料。

この時代、女はお金を貯めてて悪いことないんだから」

私の貯金額っていくらっけ？

そう本気で考えていると、美紀は寝てしまっていた。

いいなー、充実している人は。

彼氏もいて、仕事も出来て羨ましい。

私って、どうなんだろう？

08（後書き）

少し追加しました。

「はぁ、寒い」

あれから私も結局寝てしまっていた。

床に雑魚寝は、久しぶりで体のあちこちが痛い。

「起きたんだ。

まだ、寝てていいのに」

ふと、声をする方を見ると美紀がキッチンで料理しているのが見えた。

そっか、昨日は美紀と私の家で飲んだんだ。

大人でしっかりした人間は、お酒を飲んでも次の朝も抜かりないんだー

ふと味噌の香りで、そう思ってしまった。

最近、料理もきちんとしてないなー私。

「そうそう、雪

携帯なってたよー

無機質な音じゃなくて、女の子らしく可愛いのに変えればいいのに可愛くないんだから」

携帯が鳴ってたんだ、美紀から渡された携帯を受け取る。

けど、どうせお母さんだろうなー

今年的大型連休は帰ってくるんなら、旅行にでも行こうって
この前話でたしね！

「どうせ、お母さんだと思うよ。」

この前旅行に行こうって話してたから。
それについてじゃない？」

「お母さんと旅行に、いつ？」

美紀がキッチンからにゅっと首を出してきた。

「この大型連休にね」

「ふーん。」

この大型連休って、私彼氏と りょこう」

うふっという話をしてくる奴
むかつくー！

「いいもんね、家族みずいらず

と携帯を開いた瞬間ビクリしてしまった。

そこには、予想もしない人物の名前があったから。

「瀬崎さん？」

「へえ」

「顔に出るっていつてるじゃん、雪。
まあ、良いタイミングでの連絡よね」

休日であいてる日がありますか？
少しお話したいです。

たった二行のメールだったけど、
私をビックリ驚かすには十分な内容だった。

「ちょっと貸して！
明日でも大丈夫です。」と

ちよつと、しまった。
あれよあれよと、手の中にあつた携帯が美紀の元へと渡ってしまつた。

「もしかして送ったとか、？」

「送って大丈夫でしょ
あんたフリーなんだから、日曜暇だし
話は早いほうがいいし」

とあつけらかと話す。

せつかく明日は瀬崎さんとデートなんだから
綺麗な服きないとね！

今日の予定が決まった！と美紀はお玉を振りかざしながら話す。

今日も明日も部屋に引きこもろうと思ったのに。

というか付き合っていないんだから、デートっていわなくない？
話の内容だって、そんな甘い内容じゃないし

ダメだ。。。

「これ、着て今日行かないといけないのか」

目の前には、昨日美紀に無理やりデパートに連れていかれて買わされた服。

メイクをしたので一応ベツトに服を全部出してみたものの、気が重くてたまらない。

「二十八の女が、ちょっと休日出かけるくらいで

ドキドキしてんじゃないの」

と美紀は言うけど、最近会社と家のベツトへの往復しかしていなかった私にとっては重いだよ。

色んな意味で、面倒でどうしようもないし

しかも、相手が一度もあんまり深く話した事がない瀬崎さん。

どうやら、近くの駅に車で迎えにきてくれるらしいけど、

「やばっ、あと三十分しかない」

時計を見ると待ち合わせ時間が11時にもかかわらず、10時30分を指している。

私は慌てて服を着始めた。

「似合うのかなー」

そこには、普段の通勤スタイルとは違う私がいる。

休日なんだから、休日らしくしなさいよ！

と彼女の言われるままに、普段パンツ派なのにスカートを買わされてしまったのだ。

スー、スーするなーと思いつつ待ち合わせの場所へと向かった。

駅の時計は10時53分。

待ち合わせ時間には、どうにか間に合ったとホっとしたのも束の間。その場所には、もう瀬崎さんの姿があった。

「休日に呼び出してごめんね、相田さん」

やっぱ、私服姿もかつこいい！

センスも良くて、顔も良くて、性格は分からないけど多分良いとして。

こういう天が全てを与えた人って世の中にいるんだーと改めて思ってしまう。

「いいえ、私もあの事でお話したい事がありましたし。

会社じゃ、中々お話できる内容じゃないですから

瀬崎さんに、ご連絡頂いて良かったです」

そうだ、話ながら気づいたけど。

彼にドキドキしてはいけないんだ。

結局、結論は後日って事になったんだから彼の、あの時と発言の本意を聞かなければ！

「じゃ、ここじゃ話もあんまり出来ないからお昼ごはんを食べがてらと言うことで」

と私は瀬崎さんに連れられ駐車場に向かった。

「ごめんね。」

急に車で移動とかダメだったかな？」

「いえ、そんな。」

こちらこそ変に気を使って頂いて」

普段、車運転することが無いから

この機会にと思ってね、とスタスタと長い足で歩く瀬崎さん。ただ歩いているだけなのに、まるで赤い絨毯の上を優雅に歩いているみたい。

「これだから、どうぞ助手席に」

彼が指さしていたのは、まぎれもなく外資系ブランド超高級車だった。

ブラックの車は、彼のスタイリッシュさによく似合う。

「とても良い車ですね。」

私、ちょっと傷つけたら怖くて乗りたくないんですけど」

本当にそう、この繊細そうなボディーに私のバックや靴の金具が当たったら

怖くて怖くて、笑えない。

「ああ、そういう事なら大丈夫だから

結構この車修理に出してるし、そんなに大事にしてる訳じゃないから

唯一のストレス発散というか」

「ストレスですか？」

はいどうぞ。と助手席のドアを明けながら笑いながら彼は話した。

「いくら仕事が好きでも、ずっと会社と家の往復はストレス溜まるでしょ。

で、そのはけ口だね。この車を買ったんだ」

へえー、こういう人生をいかにも上手く切り抜けてそんな人でも大金を払わないとスツとしない程のストレスを感じるんだ。

「シートベルトはお願いね」

そう言われ、車がすーっと動き始めた

連れて行って貰ったのはお洒落なc a f eだった。
さすが、慣れてるなーと感じる。

「パスタが美味しいからどうぞ」

言われるままに、注文してパスタを美味しく頂いている訳だけど
これで良いのだろうか。。。。

「相田さんは、あの話についてしたいなっていう顔してるね」
さらっと瀬崎さんは言った。

「そんなに私、顔に出るタイプですか？」

ちよつと美紀に続いて、顔に出るって
ちよつと馬鹿にされた感じで、ムカツクんですが。

「他の誰かにも言われたの？」

「美紀、あつ藤井さんです」

そうか、藤井さんと仲が良いんだね。

君達は確か同期だったけど、彼は優しく笑いながら言った。

「何で、あの時一緒に反対してくれなかったんですか」

このままじゃあ、何か色んな物に流されそうな気がして
とりあえず単刀直入に話をぶつけてみる事にした。

瀬崎さんは、ああ直球できたねという顔をしている。

「何でって、面白そうだったから」

「はあ!？」

くすくすつと笑いながら、彼はまだ話を続ける。

「君のその反応とか

そういう話も面白いなって思ったんだよ。

仕事は面白いけど、それ以外は単調な毎日だしね」

うん？ちよつと可笑しくなってきたいる。

ちよつと待って！

「いや、だってあれは瀬崎さんだって嫌でしょ
彼女も家に呼べなくなったりするんですよ」

そうだ、こういう人間には大体は途切れずパートナーがいるはずだ。

「いないよ。」

三ヶ月前に別れたというか、一年海外に居たから実質もう居なかったと同然。

君は？」

こっちが聞いていたはずなのに、逆に聞き返されてしまった。

「い、いませんけど」

どう言っているのだろうか、自分から切り出しておいて恥ずかしい。

「じゃあ、決定ということで

というか、相沢さん。

社長があれだけ関わってるプロジェクト簡単に降りれると思ってたの？」

「へ？」

「あの場所は、もう決定事項の伝達だったんだよ。

表向きは他の人間も居たから、ああだったけど」

もう、何回だろうか頭が真っ白になってしまったのは
強制参加なんだ、この任務は、、、

「と、僕は前から君に興味があつたしチャンスだと思つたのも確か。これから上手くやっついていこうね」

瀬崎さんから出された右手を、私は力無く握ってしまった。
この関係上手くいきますか？本当に

社会人数年目に、ぶち当たったこの壁を私は上手く乗り越えられる
のだろうか

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9673w/>

特殊任務！

2011年10月31日17時22分発行